太陽からの手紙

■楽曲データ

歌詞：原真弓　作詞

楽曲：吉川忠英　作曲（酒井良一　編曲）

発表：浄土真宗本願寺派本願寺第11代顕如宗主400回忌法要・本願寺寺基京都移転400年記念法要法要事務所（行事部）　1990年

初演：―

初出：『400年法要イメージソング　太陽からの手紙』　浄土真宗本願寺派　1990年

管理番号：M0286

■創作の経緯

本願寺第11代顕如宗主400回忌法要・本願寺寺基京都移転400年記念法要のイメージソングとして制作。

■校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第２巻収録

底資料：『400年法要イメージソング　太陽からの手紙』　浄土真宗本願寺派　1990年

比較資料：―

校訂の詳細：特記事項なし

■解説

◆内容について

この作品では、仏教的な用語はほとんど用いられていません。そのかわりに出てくるのは、「太陽」や、「空」「風」といった自然を表す言葉です。

作詞を担当した原真弓さんはこの作品について、「この世の中のすべてのものは、私に対する、皆さんに対する、すてきな贈り物」という発想から「自然」を見直すことになった、と語っています。こんなに素晴らしい贈り物をもらった私たちが生かされているのにはきっと深い意味がある、という思いが、「私らしく今日を歩きたい」という一節をうみだしました。

地球上にふりそそぐ太陽の光のように、阿弥陀さまのお慈悲も私たちを余すところなく包んでくださいます。そのなかで、周囲へのやさしさや思いやりをもちながら日々の暮らしを送ることが、「私らしく」あることへの第一歩なのではないでしょうか。

◆作詞者・作曲者について

作詞の原真弓さん（1958～）は、1984（昭和59）年から作家活動を始め、1988（昭和63）年、光GENJIの《サマースクール》で作詞家デビュー。仏教讃歌では、ほかに《ひかりあふれて》の作詞もてがけています。

作曲の吉川忠英さん（1947～）は、ギタリスト・作曲家。1971（昭和46）年のアメリカ・デビューを経て、1974（昭和49）年に日本デビュー。アコースティックギターの第一人者として、数多くのアーティストのレコーディングやコンサートに参加するほか、自身のソロライヴツアーも毎年行うなど、幅広く活動しています。

◆練習のヒント

【作品の構成】51小節目の「D.S.」は、「ダル・セーニョ」という記号で、「セーニョ記号（𝄋）のある小節へ戻る」という指示です。したがって、１番・２番を順に歌ったら23小節目へ戻り、１番の歌詞で23～39小節目、そして52小節目以降を歌います。

①４小節をひとまとまりに感じ、スケールを大きく表現しましょう。休符をはさんでも、音楽の流れは続いていくように。

②この曲では、すべてのフレーズが１拍目以外の拍から始まります。特に１小節目のように、１拍半の休みがあるときは、歌の入りが遅れやすいので、要注意です。また、２小節目の「付点４分音符+８分音符」というリズムも、付点４分音符を伸ばし過ぎてリズムが崩れやすい形です。ポイントはどちらの場合でも、２拍目をきちんと感じること。自分で拍子をとりながら歌ってみましょう。

③前半（７～22小節目）は、８分音符が連続する部分の音程に注意しましょう。１小節目では最初の音を正確にとり、下行音型で下がりすぎないようにします。２小節目の「ミ」→「ラ」の跳躍はしっかりあがりましょう。また、11小節目は３回出てくる「ソ」がすべて同じ音になるように、音程をまとめましょう。

④19～22小節目は、この曲のカギとなる部分なので、はっきりと歌いましょう。

⑤後半（23小節目以降）は伸びやかに。前半よりも音域が上がりますが、喉は開放したままで。

⑥最後のフレーズ（38小節目以降）は、歌詞そのままに、本当にほほえんでいるような雰囲気で歌いおさめましょう。

◆楽譜・音源について

オリジナルは女声二部合唱です。

音源は、ＣＤ『ほほえみとともに――歓びの合唱（うた）』に混声四部合唱で収録されています。

解説執筆：山口篤子（本願寺仏教音楽・儀礼研究所［現・浄土真宗本願寺派総合研究所仏教音楽・儀礼研究室］研究員）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 84（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第 211 号収録）を加筆・修正のうえ、転載。

Copyright: Jodo Shinshu Hongwanji-ha Research Institute. All Rights Reserved.